証言

ティンパレー報道の真相

福田篤泰
（当時、外交官として中華民国在勤。現衆議院議員）

「南京事件」の代表的な逸話となった〝百人斬り競争〟の片桐部隊（歩9）野田毅少尉（25歳・右）と向井敏明少尉（26歳・左）　両少尉が無錫―南京で各々105・106人を斬って武勲を競う話が報道され　2人は戦後南京裁判で「新聞記事は創作」と抗弁するが刑死（12月・常州）

私が南京城内に入ったのは、陥落の翌日で、まだ市街戦が行われていた。上海から日本軍の進撃に同行したのは、南京に残留している外国人を保護するために外務省の人間が必要だという軍の要請があったためだ。

私と、上海から同行した満鉄職員四人とは、入城後ただちに新街口の中国銀行南京支店に入り、ここで特務機関といっしょに領事館業務が再開する三月ころまで合宿して電気、水道などをはじめ、市内の復旧にあたった。日高信六郎参事官らが船で上海から南京へ到着したのは陥落から四日後だと記憶している。

さて、問題の〝残虐事件〟のことだが、まずこれを世界に流したマンチェスター・ガーディアン紙の記者T・J・ティンパレーについていえば、彼は陥落直後、結婚のために帰国したいというので、日高氏が骨を折って軍にかけ合い、何とか出国証明をとって帰国させたのだが、このとき持ち出した資料をもとに『中国における日本軍の残虐行為』（一九三八年七月編集発行）を発表したと思われる。

残虐行為の現場は見てないが、私はあれだけ言われる以上、残念ながら相当あったと思う。しかし私の体験からすれば、本に書いてあるものはずいぶん誇張されているようだ。

当時、私は毎日のように、外国人が組織した国際委員会の事務所へ出かけていたが、そこへ中国人が次から次へとかけ込んで来る。「いま、上海路何号で一〇歳ぐらいの少女が五人の日本兵に強姦されている」あるいは「八〇歳ぐらいの老婆が強姦された」等々、その訴えを、フィッチ神父が、私の目の前で、どんどんタイプしているのだ。

「ちょっと待ってくれ。君たちは検証もせずに、それを記録するのか」と、私は彼らを連れて現場へ行ってみると、何もない。住んでいる者もいない。

また、「下関（シャーカン）にある米国所有の木材を、日本軍が盗み出しているという通報があった」と、早朝に米国大使館から抗議が入り、ただちに雪の降るなかを本郷（忠夫）参謀と米国大使館員を連れて行くと、その形跡はない。とにかく、こんな訴えが連日、山のように来た。

ティンパレーの原資料は、フィッチが現場を見ずにタイプした報告と考えられる。（注・『中国に――』の序文には「本書作成に当っては、南京国際委員会の協力を得た」とある）

陥落直後の日本軍が非常に殺気立っていたことは確かだった。中国軍の抵抗は激しかったし、急な進撃で兵隊のなかにはボロボロの夏服でふるえている者もいた。途中、食糧は不足し、やせて悲惨な状況だったことが略奪の一因といえる。さらに、安全地区の難民に便衣兵が交じっていたことも事実で、日本軍がある家を捜索したら天井から鉄砲がゴッソリ出て来たこともあった。事件は、戦場という異常な状況が生んだ異常な出来事といえよう。

しかし、東京裁判でマギー神父が証言しているように、街路に死体がゴロゴロしていた情景はついぞ見たことはない。クリークに浮かぶ死体を見たことはあった。またマギー証言に登場する田中領事は、田中正一氏のことで、彼は陥落一ヵ月後くらいに漢口から来た人だ。（注・外務省人事課によれば田中正一氏は、昭和一三年二月二八日付で南京領事となっていて、昭和三二年に死亡している）。証言にある「一二月一八日」には南京にいなかったし、着任後もそんな話を聞いたことはなかった。

ただ、各国の大使館もかなり荒らされて、これには困った。各国外交団が南京へ戻るというので、二日間寝ずに修復したり、盗まれたオートバイや自動車を弁償したり、えらい苦労したものだ。軍のなかには、強姦している兵隊を見つけて、軍刀が曲がるほど殴りつけた参謀もあったというが、「殺せ、焼け」と言った師団長がいたという話を、中国人や参謀の一人から聞きもした。

入城後、松井軍司令官は、師団長を集めて「皇軍の赫々（かくかく）たる戦果はこの事件で水泡に帰した。陛下にご迷惑をかけて申し訳ない」と、泣いて訓示したと御厨（正幸）参謀から聞いた。この話を東京裁判で話したら、記録してくれなかったのが強く印象に残っている。（談）